

2026年 AIの展望：松尾豊教授の予測

東京大学の松尾豊教授は、2026年がAIの勢力回を大きく塗り替える年になると予測しています。本インフォグラフィックは、世界の覇権争い、AIが拓く新たな市場、そして日本が取るべき戦略という3つの観点から、義務の分析の要点をまとめたものです。

OpenAI対Googleの競争が激化

Googleの高性能モデル「Gemini」の整備により、同社の覇権争いは新次元に突入。



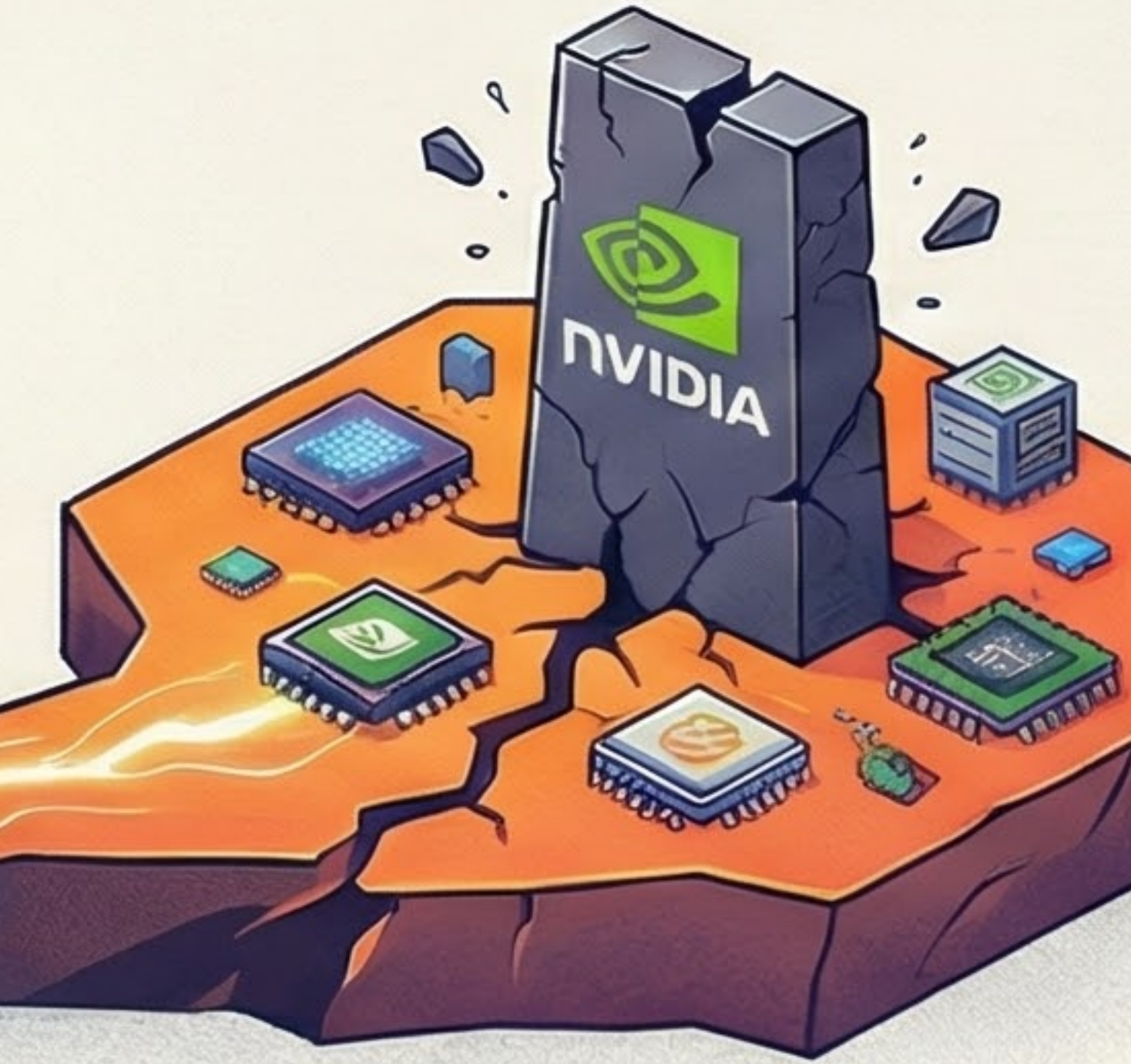
中国勢が「オープンソース戦略」で市場を揺るがす

高性能モデルを無償公開し、米国企業のビジネスモデルに挑戦している。



半導体は「ポストNVIDIA」時代へ

NVIDIA一強体制に対し、Googleや日本のスタートアップなどが競む。



チップ種類	汎用性	電力効率
NVIDIA GPU	 非常に高い	 課題あり
Google TPU	 低い (AI特化性)	 高い
Renzo CGLA (日本)	 高い	 90% 極めて安い (GPUにVIEA特化)

AIが拓く未来と日本の勝ち筋



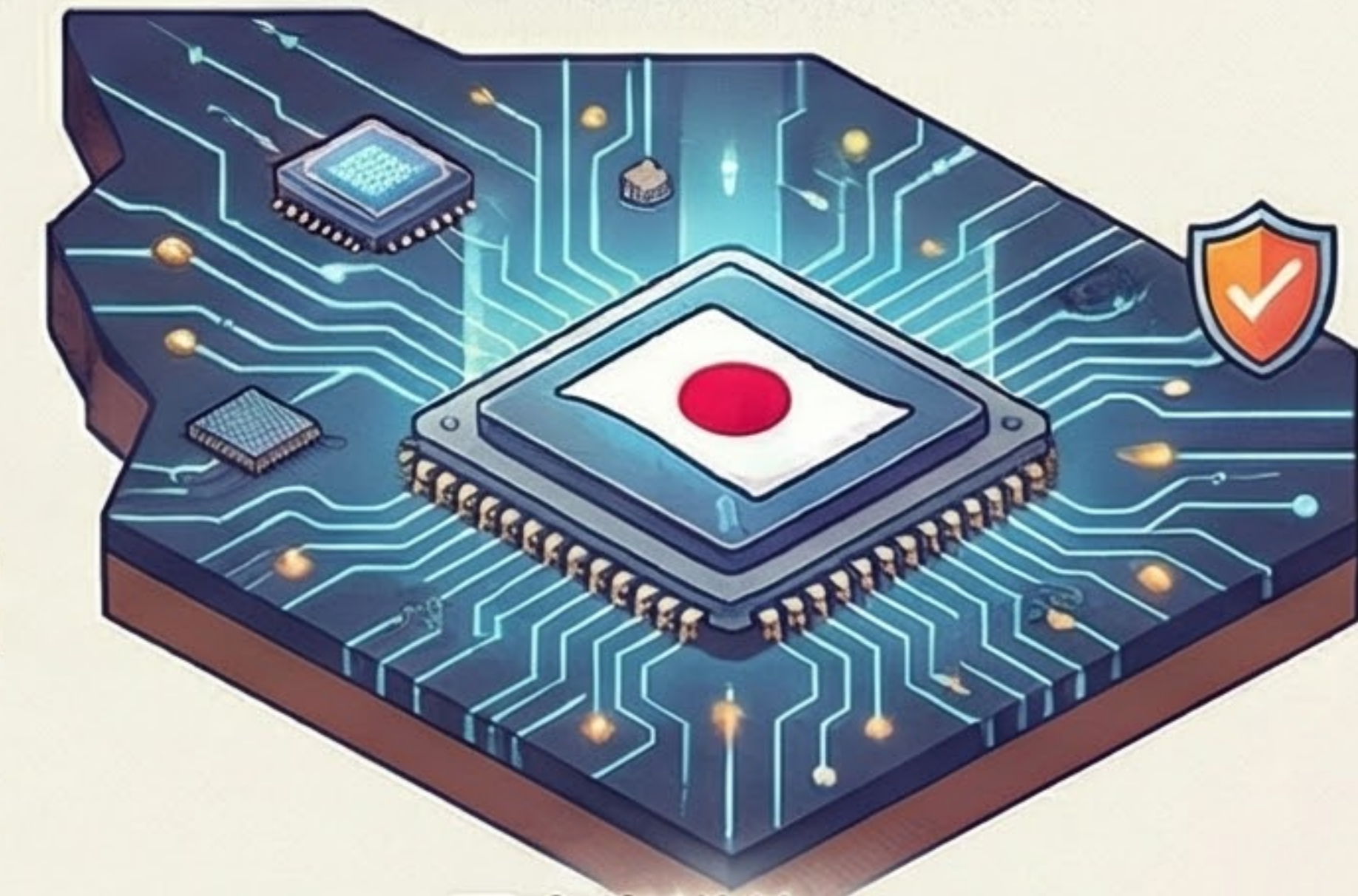
「家庭用ロボット元年」が到来

2026年頃、家事を代行する人型ロボットが一般家庭に普及し始める可能性がある。



日本の勝ち筋は「活用からのイノベーション」

既存技術を現場で応用・改良し、自動車産業のように新たな価値を創出する。



国産半導体で「技術主権(ソブリンAI)」を確保

ラビダス計画は、海外に依存しない日本のAI基盤を支える安全圏上の価値を持つ。